

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	松井 一馬
主 論 文 題 名： The Spectacle of the Empire: Haunting Figures in Henry James's Later Works (帝国の視者：ヘンリー・ジェームズ後期作品における他者表象)				
(内容の要旨) 本論はヘンリー・ジェームズ (Henry James) の主に後期作品における幽霊に着目し、その表象に帝国主義的な言説の揺らぎと、新たなる帝国として領土獲得競争へと邁進していきつつあった 19 世紀末のアメリカへの危惧を読み取ることを目的とするものである。例えば Kenneth W. Warren のもののよう、ジェームズ作品における人種性の表象に関する論は数多く、また、Adeline R. Tintner のように、ジェームズ作品におけるオリエンタリズムに関してもすでにいくらか論じられてはいるが、個々の作品において論じられる人種性やオリエンタリズムは、ジェームズ作品の中心的テーマとも言える国際性と結びつけられてはおらず、また、ジェームズが常に描いていた主体としての意識と関連付ける研究もほとんどなされていない。また、近年、Philip Horne や市川美香子氏らがジェームズとセオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt) との間の対立関係などの興味深い伝記的事実を指摘しているにも関わらず、ジェームズ作品と帝国主義の関係を体系的に論じた研究もほとんどない。本論はこれらの点において従来のジェームズ研究に新たな地平を提供することを企図する。すなわち、帝国主義という統一的な観点からジェームズ作品を分析することで、それが国際性であったり人種性やオリエンタリズムという形をとって作品中に表出しているだけでなく、視点人物の主体としての意識にも強い影響を与えていることを明らかにするものである。加えてその過程において、従来の支配的なジェームズ作品のカテゴリ、すなわち国際関係もの・超常現象もの・芸術家ものという分類を再考し、これらが主体としての世界認識の仕方を「見える／見えない」という表裏一体の立場から描いたものであることをも示していく。本論はこの点でもジェームズ研究に大きく貢献するものとなるであろう。  ジェームズ作品の第一の特徴は曖昧性にあると言える。その曖昧性ゆえに作品をどう解釈するか議論が繰り返され、様々な批評理論の対象とされ、Shoshana Felman のように曖昧性そのものを分析の対象とする例もある。しかしそこで見過ごされてきたのは、ジェームズ作品の時代性である。繰り返し芸術家における観察の重要性を主張したジェームズの作品が常に曖昧性を持つのであれば、それは第一に、彼が観察しえた当				

時、すなわち 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのアメリカとヨーロッパの文脈からもたらされたものと見なすべきであろう。そして彼の主要な作品が国際性を主題として描いたものであるということは、その曖昧性と国際性とは密接な関係があるということだ。

ジェームズが生きた当時は、帝国主義が進展し瓦解を迎えようとする時代であった。これまでジェームズ作品の国際性は無垢なアメリカと経験を積んだヨーロッパという二項対立の図式で語られてきたが、しかしその図式はあまりに単純に過ぎる。というのも、当時の国際関係は新世界と旧世界という二項に収まりきれものではないからだ。ポストコロニアリズムが明らかにしてきたように、こうした国家間の関係の中に不可視にされてしまった存在としての植民地があることを忘れてはならない。さらに、Gretchen Murphy はモンロー・ドクトリンの歴史的分析によって、このドクトリンに表れる西半球主義とでも呼べる概念が、東半球のヨーロッパ帝国主義を否定しつつ、と同時に二律背反的に、アメリカ自身による西半球及び太平洋を経てアジアへと至る、帝国主義的領土拡張を容認するものであったことを論じている。すなわち、アメリカは独立した旧植民地であると同時に新たな帝国でもあるという、ポストコロニアルな性質とコロニアルな性質を併せ持った存在であったのだ。であれば、ヨーロッパとアメリカの対立図式は、帝国間の対立であると同時に植民地と帝国との対立でもあるという多面的な様相を帯びることになる。

と同時に忘れてはならないのは、ジェームズ作品が常に「見る」こと、つまり世界をいかに知覚するかについて描いているということだ。植民地的他者が幽霊として登場するのは、それらが帝国主義下に生きる人間にとっての理性的・近代的な世界の知覚における異物であるからに他ならない。すなわち、ジェームズの超自然現象ものの作品は、帝国という一元的秩序における植民地的他者というほころびが、主体にその世界認識が客観的・絶対的なものではなく主観的・相対的なものでしかないことを気づかせる物語であるのだ。

このように「見る」ことに着目すれば、ジェームズの国際ものの作品もまた、こうした「気づき」の物語、すなわち、「見る」ことに長けていない主人公が世界を見誤る物語と捉えなおすことができる。*The Portrait of a Lady* のイザベル・アーチャー、*The Wings of the Dove* のミリー・シール、*The Golden Bowl* のマギー・ヴァーヴァーといった若いアメリカ人女性たちばかりでなく、*The Ambassadors* のランバート・ストレザーのような初老の男性もまた、非常に主観的な見方で世界を見誤り、それゆえ手痛いしっぺ返しを食う存在として考えることが出来るのだ。これらの作品においてジェームズが描いているのは、世界が見えているままその通りの姿ではない、むしろ、世界を主観

的に、見たいように見ているだけかもしれないという可能性であり、別の言い方をすれば、これらは「いかに見えていないか」の物語であるとも言える。そして、他者には世界が別に見えていたこと、さらに、自分が自分の思っていたのとは別の姿で他者に見られていたことへの察知は、すなわち、間主観的な世界認識を獲得する瞬間でもある。言わばジェームズの国際ものの作品とは、主観的な世界認識から間主観的な世界認識への変化を描いた作品なのだ。

こうした世界認識の転換は純粹に認識論的な問題ではなく、常に政治性を帯びている。いかに私的な生活や人間関係であろうとも、見る者を取り巻く世界は政治抜きには存立しえない、言うなれば人間生活という上部構造は政治という下部構造によって規定されているのであり、政治性は表面的には見えない形で常に世界に存在しているのである。ならば、芸術の第一義を観察におき、混沌とした世界に形を与える営為と定義したジェームズの作品には、ジェームズ自身を取り巻く政治的状況が見えない形で、Fredric Jameson 呼ぶところの政治的無意識として、表出されていることになる。その国際ものにおいて描かれる世界認識の転換は、ジェームズ自身の生きた 19 世紀後半の世界における国際的な政治状況の転換、帝国主義というヨーロッパ主観的な世界秩序が転換しようとしていた時代性がもたらしたもののなのだ。

こうした政治性の表面的な欠如と、ジェームズの超自然現象ものの作品群は結び付けて考えなければならない。Leon Edel の編纂したジェームズの超自然的現象ものの作品集 *Henry James: Stories of the Supernatural* では、習作期の数編を除いたすべてが 1891 年以降に発表されている。その直前、1880 年代後半のジェームズは、文壇の大家としての地位を確立しながらも、作家としては不遇を極め、特に 1886 年の 2 つの作品、*The Princess Casamassima* と *The Bostonians* の悪評により、長編の断筆と劇作家への転身を決意している。それも結局戯曲 *Guy Domville* の不評で断念するのだが、この二作品がジェームズの中で数少ない、アナーキズムと女性権拡張運動という政治活動を直接描いたものであることは注記に値する。というのも、これらはジェームズが政治に無関心であったわけではないことを示すと同時に、小説への復帰に際して作品中で直接的に政治性を取り扱うことへの躊躇を生んだと考えられるからである。そして、この政治性の抑圧が 1890 年代の超自然現象ものの量産をもたらすのである。

ジェームズに限らず 19 世紀末には超自然現象を扱ったゴシック小説が大流行していたことが、その背景に心霊主義の台頭があったのは言うまでもない。ここで興味深いのは、当時の心霊主義、オカルティズムが非西洋、それも特にインドという植民地としばしば密接に結びつくことだ。例えば神智学協会において顕著なこの結びつきは決して偶然ではない。というのも、心霊主義の台頭は近代西洋の唯物論的・実証主義的世界観の

裏返しであり、また進化論をはじめとする科学への信奉がキリスト教信仰への不信を呼んだ結果であるのだが、近代西洋の唯物論的世界観を如実に体現していたものこそ帝国主義であったからだ。「文明化の使命」という帝国主義の掲げる主張が文明と野蛮という二項対立を生み、帝国が体現する科学や文明へのアンチテーゼとして生まれた心霊主義は、必然的に野蛮を体現するもの、すなわち植民地へと同一化することになる。であれば、当然、心霊主義の影響で流行したゴシック小説もまた、植民地との親和性が高いことは言うまでもない。

このように、植民地と幽霊の結びつきを考察する際、Fredrick Jameson の帝国主義下の時代の他者性についての論考が非常に有用であろう。植民地主義下において母国がその経済的基盤を植民地に置きながら、隔絶した土地である植民地とは生活や経験を共有し得ないがゆえに、全体としての意識が失われ、帝国内部における根本的な他者性を埋めることが出来なくなったと述べる Jameson は、植民地の持つ他者性は 19 世紀後半には他の帝国へと他者性の軸を置き換えられて文学作品に表出されていたとしつつ、こうした表現上の戦略が植民地の収奪という帝国主義的戦略を根本的に変えるものではなく、むしろ「植民地的他者 (the colonized other)」を見えなくしてしまった、と論じる。この論理はジェイムズ作品においてきわめて示唆的である。国際ものの作品において若い無垢な主人公に他者として対立するのは、ヨーロッパという総体ではあれまさに帝国という目に見える他者であり、そして本来であれば見えないはずの他者が「見えてしまう」のが、超自然ものの作品であると言えるからだ。つまり、ジェイムズ作品の幽霊は、帝国主義下において見えなくなった植民地的他者として捉えなおすことができるのだ。

さらに、帝国の秩序を崩壊させる植民地的他者は、ジェイムズ作品においては重層的な様相を呈する。Patrick Brantlinger は 1885 年から 1916 年までの帝国を舞台としゴシック的要素を持つ冒険小説群をインペリアル・ゴシックと名づけ分析しており、こうした作品群が、しばしば西洋人が非西洋の、それもキリスト教的概念から外れた超自然的存在に脅かされるというプロットを持ち、それが、文明が容易に野蛮へと立ち返ってしまうこと、そして帝国支配のヘゲモニーが弱まっていることへの不安感を表出したものであると論じている。ここで興味深いのは、この時代区分がジェイムズの超自然現象ものの集中する時期とほぼ重なっていることだ。インペリアル・ゴシックの代表としてあげられる作家たちスティーヴンソン、キプリング、コンラッドと親交を持ち、彼らとほぼ同時期に超自然現象ものを書いていたジェイムズもまた、インペリアル・ゴシックの作家だったのである。確かにジェイムズ作品の舞台はアフリカでもインドでもないが、しかし、アメリカもまた、かつてイギリスという帝国の植民地だったことを忘れてはな

らない。そして、帝国のヘゲモニー弱体化が現れる場所として、アメリカほど適切な例はないだろう。なぜなら、この「植民地」はすでに帝国の支配を覆し独立しているのだから。ゆえに、ジェームズ作品の幽霊、植民地的他者にはアメリカの表象を読み込むことが可能になる。なぜならば、帝国の支配を打破し植民地から独立したポストコロニアル国家アメリカは、帝国主義以後の秩序を世界にもたらしうる存在であったからだ。

ここにおいて、ジェームズの超自然現象ものと国際ものは表裏一体の主題を描いていることに気付かされる。多くの批評家が指摘するように、ジェームズが国際ものにおいて描き出さんとしたのはアメリカの姿であった。しかし、見誤ってはならないのは、ジェームズが描いたのは、これまで論じられてきたようなアメリカ性を体現する存在というに留まらず、アメリカという国家そのもののアレゴリーであるということだ。独立という形で帝国主義を否定しポストコロニアル国家として誕生しながら、世紀転換期のアメリカはむしろ新たな帝国として西半球への領土拡張に邁進していた。こうしたポストコロニアル帝国アメリカの多義性をアレゴリカルに表象するからこそ、ジェームズ作品は曖昧にならざるを得なかったのだ。ジェームズ作品は、アメリカという国家の理想像と、その現実の姿を二重写しに浮かび上がらせているのである。

本論文では以上のような観点に立ち、帝国主義的状况がもたらした主体／主題／帝国臣民への影響を読み込みつつ、体系的にジェームズ作品を捉えなおすことを企図する。

Chapter One “A Guide to the Other World: The Way of Seeing in Henry James’s *Supernatural Tales*”では1890年代の超自然現象ものの作品群における幽霊の姿を考察する。ジェームズ作品における幽霊は常に見る者にとって他者でありながら主体との相似性をもあわせ持ったオルター・エゴとして表象されているのであり、見る者を見返しながら、異なる世界認識の存在を示唆するガイドとして、間主観的な世界認識を促す存在であることを論じる。

Chapter Two “When You Find a Ghost: *The Sacred Fount* as an Intersubjective Text”では1901年の長篇 *The Sacred Fount* を取り上げる。ジェームズ自身はNY版にこの作品を含めなかったが、この作品は、ジェームズの長篇中唯一の一人称の語り手によって、最も端的に主観的な世界の見誤りを描いた物語であり、この作品における「見る」という行為を分析し他の作品と合わせて検討していくことで、ジェームズ作品の中心的主題である主観的世界認識から間主観的世界認識への転換を分析することができる。加えて、語り手が作品内に物語の作者として存在し、その「見る」という行為が「読

む」に等しい解釈行為であるだけでなく「書く」という表現行為ともなっていること、さらにまた語り手も他の登場人物たちに「読まれて」いることを確認し、作品内において作者—テキスト—読者の関係が反復され、多重化されていることを検討する。そして、こうした多元的に作者性／権威が存在するジェームズのテキストのあり方を踏まえ、ジェームズが抱いていた間主観的世界認識とその秩序のありかたを考察していく。

Chapter Three “The Empire of Henry James: Revolving “The Turn of the Screw””ではジェームズの幽霊ものを代表する作品である、1908年の短編“The Turn of the Screw”を取り上げる。この作品の登場人物たちの関係性は、帝国主義的状况と相似している。Blyの屋敷における the governess, Mrs. Grose, Miles と Flora の関係は明らかにヒエラルキーを描き、遠く離れたハーリー・ストリートにあって屋敷内の状況に関与しようとなしな the master を本国と見れば、作品中で明言されるように Bly は植民地の戯画となるのだ。こうした帝国—植民地関係との相似性と、Quint と Miss Jessel という幽霊が植民地的他者性を持つことを確認していくことで、The governess が言わば総督 the governor としてこの植民地を統治しており、Miles と Flora の反抗が一種の革命であったことを検討すると同時に、その悲劇的な結末が、統治者 the governess による強権的な抑圧によって引き起こされたものであり、当時の帝国主義的状况を如実に反映したものであることを論じていく。

Chapter Four “The Ghost of Empire/ The Empire of Ghost: “The Jolly Corner” as Imperial Gothic”では 1916 年の短編でありジェームズにとって最後の幽霊ものの作品となった“The Jolly Corner”を取り上げる。作品内に描かれる Spencer Brydon による自らの the alter ego 追跡は、帝国主義下の植民地における「大物狩り big-game hunting」の様相を呈しており、長年のヨーロッパ生活からアメリカに帰還した Brydon はまさしく帝国の gentleman として狩りにいそしむ。しかし the alter ego は植民地的他者として異人種の表象を持ち、それを目の当たりにした Brydon は恐怖のあまり失神してしまう。ここに描かれているのは異人種が国内に浸透していることへの恐怖であり、それはすなわち、帝国が植民地的他者の跋扈によって崩壊していく予感でもある。と同時に、Brydon の狩りの描写にはセオドア・ローズヴェルトが投影され、彼が体現するアメリカの帝国主義がヨーロッパ同様に崩壊していくことが予見されている。このように Brydon の行う狩りを分析していきつつ、この作品における帝国とその文明化の言説の反転を検討する。

Chapter Five “A Lady, A Text, A Nation: Doubled Allegory in *The Portrait of a Lady*”では1881年の長篇 *The Portrait of a Lady* を取り上げる。この作品において、自らの遺産を Isabel Archer に与える Ralph Touchett は作品内の作者であり、Isabel は彼のテキストとなっている。しかし、重要なのは Ralph がその遺産分与によって Isabel を支配するのではなく、むしろ好きなことをできる自由を与えていることであり、それは Felman が指摘したように、自らの作者性を作品から消すジェイムズ自身の振る舞いとも重なり合う。Ralph の死は、むしろそれによって彼を物語中から不在にし、そのテキストを完成させるものであり、こうした作品内作者の振る舞いは、帝国という権威とともに一元的な世界観が崩壊を迎えようとしている中での、新たに世界を支える秩序を確立しようとする試みではないか。と同時に、Isabel にアメリカの表象を見出していくことで、彼女が甘んじる悲劇的な運命が、新たな帝国へと向うアメリカの進路を暗示するものである可能性を検討していく。

F. O. Matthiessen はヘンリー・ジェイムズの今日の評価を決定付けた名著 *Henry James: The Major Phase* の序において、“It is a particular pleasure at this time, when the vitality of our future culture will have to depend more and more upon its international relations, to dwell upon James as a forerunner of such an awareness.” と述べた。その Matthiessen が自ら命を絶ってからすでに60年が過ぎた現在においても、この言葉は未だ大きな説得力を持つ。いやむしろ、その切迫性ははるかに増している。グローバリゼーションと世界の多極化が進展する中、宗教対立と非寛容の袋小路にアメリカが孤立する現在の状況においては、第二次世界大戦中であった Matthiessen の当時以上に、その“future culture”の生命力は国際関係に左右されると言える。そして、ジェイムズ研究も当時以上に有意義かつ不可欠なものであるだろう。なぜなら、国際的意識の先駆者たるジェイムズの作品の中には、まさしく現在のアメリカへと結びつく問題、すなわち、新たな帝国として邁進していくアメリカの姿と、その下における人間の意識が描かれているからである。

## Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	<input type="checkbox"/> "KOU" <input type="checkbox"/> "OTSU" No.	*Office use only Name:	Kazuma Matsui
Title of Thesis: The Spectacles of the Empire: Haunting Figures in Henry James's Later Works 帝国の視者：ヘンリー・ジェームズ後期作品における他者表象			
Summary of Thesis: <p>Henry James's ghost tales are piled up around the turn of the nineteenth century, when Gothic novels flourished against the background of a burgeoning interest in spiritualism. Importantly, this was also the era of imperialism. Spiritualism, as conspicuously evident in the Theosophical Society, often had an affinity with the colonies. This is also true of Gothic tales; they express anxieties about the reversion of civilization to barbarism and the possible subversion of imperial hegemony. While the colonies maintain notions of the other within the empire due to the spatial disjunction, the territorial inclusion masks their otherness and makes it invisible. Thus, the invisible "colonized other" haunts the empire and often appears in Gothic tales as ghosts, inevitably bestowed bestiality and savagery, jeopardizing and threatening the dominance.</p> <p>Moreover, James's ghost tales resonate with the intricacies of American imperialism. The idea of the Western hemisphere, the foundational notion of America, allows the nation to have the two divergent qualities: postcolonialism and imperialism. Denying European imperialism via the Revolution, America maintained white supremacy and expanded imperialistically in the late nineteenth century. Therefore, James's ghosts are the embodiment of fears, not only of the disruption of the old European empire, but also of the course of this new, postcolonial empire frightened by the racial, "colonized other."</p> <p>Furthermore, while ghosts represent the colonized other, they are also the alter egos of those who see them. Seeing is the essential subject of James's works. In his "international" works, the protagonist who sees the world subjectively collides with others who see the world differently. His characters learn that the world is not as it seems and that he/she is also seen by others. The typical plot of these tales centers on the story of how one cannot see. James's "supernatural" tales also narrate the story of how one can see. In these tales, the ghosts bear some similarity in a way to those who see them and they return the gaze. Appearing as the alter egos of those who see, the ghosts suggest an alternative way of seeing the world.</p> <p>Chapter One clarifies James's characters' subjective view of the world and illustrates how this view collapses under the gaze of others. The characters, thus, acquire an intersubjective vision, which is illuminated in Chapter Two by way of examining <i>The Sacred Fount</i> (1901). The collision of the two visions sometimes results in tragic consequences, which is exemplified in Chapter Three with an examination of "The Turn of the Screw" (1898), where the ghosts as the "colonized others" transgress and disrupt the imperial order. Chapter Four elucidates the "colonized otherness" and racial</p>			



## Thesis Abstract

connotations in the alter ego of the protagonist in "The Jolly Corner" (1908), revealing the echoes of American imperialism at that time. Chapter Five deals with *The Portrait of a Lady* (1881) and clarifies James's anxieties concerning America and its failure to attain its foundational ideals in the late nineteenth century. These analyses can help reveal the politics deliberately concealed in James's works and illustrate how an imperial subject is disturbed epistemologically in the eyes of the "colonized other."